



### 中国がわかるシリーズ 42 クビライの即位

ライフネット生命保険株式会社  
創業者 出口治明氏

クビライは、熟柿が落ちるように腰を据えて南宋攻略を考えていましたが、果敢な性格のモンケはそれに飽き足らず、クビライを外して自ら親征を決意しました。しかし、四川に進出したモンケは、1259年、そこで病没しました。ユーラシアの暦の統一を考えユークリッド幾何学を好んだポリグロトのモンケは、おそらく同時代のフリードリヒ 2 世と並ぶ近代人であり、フリードリヒ 2 世に勝るとも劣らない有能かつスケールの大きい皇帝でした。モンケの構想は、のちに、マラーガの天文台や授時暦に結実します。

モンケが急死した時点で、バトゥは既に他界しており、キングメーカーは不在でした。モンゴルの伝統的な考えでは、モンゴル本土の留守を預かる、末弟、アリク・ブケが最有力候補でした。しかし、モンケ以上の資質に恵まれたクビライは、クーデタを決意したのです。

1260年、クビライは、オッチギンなど東方 3 王家の支援を得て、本拠、開平で自派を集めたクリルタイを開き、5 代カアンに就きました。両面作戦を嫌ったクビライは、郝経を南宋に送りました(南宋に 16 年幽閉された郝経は、雁の足に結わえた帛書に託して自分の生存をクビライに知らせようとなりました。これが雁書のお話となります)。

翌月、カラコルムにいた末弟、アリク・ブケも、モンケの遺族や、ジョチ家、チャガタイ家の支持を得てカラコルムのクリルタイで即位しました。モンゴルの伝統に従えば、アリク・ブケが正統なカアンで、クビライは反乱軍でした。しかし、軍事力、経済力に勝るクビライの優位は覆らず、1264年、アリク・ブケが降伏して、決着が着いたのです。

クビライは、(モンケのように)モンゴル帝国の箍を締め直そうと、1266年に統一クリルタイを企画しました。クビライの実弟フレグやアルグ(チャガタイの孫)は勿論、アリク・ブケを支持したベルケ(バトゥの弟)も同意しました。しかし、これら西方の 3 巨頭が相次いで病没し、3 ウルスでは、後継者の選出で混戦が生じて、クリルタイどころではなくなりました。クビライの直轄領域は、事実上東方に限られ、モンゴル帝国は、クビライを宗主として、ジョチ、フレグ、チャガタイの 3 ウルスが緩やかに結びつく連合体となりました。しかし、これが、むしろ、モンゴルの伝統的な在り方だったのです。



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

駅伝制などは、そのまま維持され、ユーラシアの風通しの良さは、ウゲデイやモンケの時代と何等変わるところがありませんでした。1260年、クビライは、世界で初めての兌換紙幣、中統元宝交鈔を発行しました。紙幣は北宋の時代から発行されていましたが(四川の交子や、金の交鈔、南宋の会子)有効期限があり、補助貨幣としての扱いでした。クビライは、紙幣を正貨としたのです。